

# 就農事例

## 川上真弘氏

調査日 令和5年1月（就農後7年目）

所在地 観音寺市豊浜町

経営主 川上 真弘

主要事業 果樹・露地野菜・水稻

主要作目 梨 60a 柑橘 10a  
レタス 80a タマネギ 10a  
水稻 90a 生姜 5a  
ぶどう 10a

就農タイプ 継承

就農時期 平成28年

労働力 家族 2名（本人、妻）  
臨時雇用 3名

## ヒストリーあらすじ

- ・川上真弘氏は他産業に従事していたが、父親が体調を崩したことから就農を決意した。
- ・小さいときから手伝いで農業に関わっており、農業大学校で農業の基礎を学び就農した。
- ・就農時は畑地の梨、柑橘を引き継いで経営し、新たに生姜にチャレンジした。その後農地を借り入れて水稻、レタス、タマネギの栽培を開始した。また、ぶどうも新たにチャレンジし、高瀬ぶどう部会に加入している。
- ・農業機械等の設備は親から継承することで初期投資を抑えることができた。その後、補助事業や資金等を活用することで、農業機械の能力を向上したりハウスの導入を行った。
- ・農地機構を活用して農地を借り入れ規模拡大を図ってきた。その中で近隣農家から農地を借りてほしいとの依頼が増えてきた。
- ・平成28年4月に認定新規就農者、令和3年9月に認定農業者、令和4年4月に農業士に就任した。

## エッセンス

### ●既存設備の有効活用と規模に見合った設備投資

- ・現存する設備を使用貸借により初期投資を抑える。
- ・規模拡大、生産量に応じた設備投資を制度資金や施策を活用して計画的に整備。

### ●農地を集約して効率化

- ・農地機構を活用して自宅周辺の農地を確保。ほとんどの農地が隣接しており作業の効率化が図れた。

### ●地域の交流

- ・JA部会など地域の組織への積極的な参加。
- ・地域の生産者との交流により、栽培技術の向上を図った。



川上真弘氏



主力品目である梨の栽培



新規作物として生姜を導入



レタスの栽培状況



梨ジョイント栽培用  
苗木の育成風景

## 川上真弘氏 ヒストリー<課題と対応策>

就農前	就農期 平成28年～	確立期 平成30年～	発展・将来構想 令和4年～
<p>●他産業に従事、実家の農業を継承した</p> <p>・実家が専業農家であり、農業を手伝ってきた。親の体調不良により就農を決意した。</p> <p>農業で生計を立てていけるか不安であったが、近くに若手の梨農家があり、話をしやすい環境だったので、相談することができた。</p>	<p>●平成28年に就農</p> <p>・香川県農地機構を利用して隣接する農地を確保</p> <p>自作地に隣接する農地を借り入れすることができた。自宅に近い所で経営の基盤を確保することができた。</p>	<p>●新たな品目を導入して経営の拡大と挑戦</p> <p>・生姜、レタス、タマネギ、ぶどうに取り組んだ。</p> <p>生姜は教えてくれる人がいなかったので独学のため失敗が怖かった。4月植え、11月収穫でありその間収入がないため、経営的な不安があった。</p>	<p>●梨の規模拡大</p> <p>・梨は耕作放棄地を活用し新植して面積を拡大。ジョイント栽培に取り組み、収穫量の増加や収穫開始が早まることを期待。</p> <p>耕作放棄地対策として梨の拡大を考えていたが、今までの活動が認められて近所の農家から声がかかり、拡大に向けて動いている。</p>
<p>●香川県立農業大学校で研修</p> <p>・退職後、香川県農業大学校で1年間の研修を受け、果樹に関する基礎知識を取得</p> <p>1年間の作業の流れが解るようになり、技術的に大変参考になった。</p>	<p>●継承した農業機械を利用</p> <p>・親の経営から新たに生姜を導入して経営を始めた。</p> <p>古い機械であり作業効率が悪かったため、SSやテイラーを更新して作業効率を改善した。</p>	<p>●梨の規模拡大</p> <p>・高齢の農家から梨の経営を引き受けて規模を拡大した。</p> <p>当初から梨の規模拡大について農家に呼びかけを行っており、引継ぎが良好に進んだ。</p>	<p>●6次産業化を目指す</p> <p>・6次産業化として、梨、ぶどう、柑橘等で製品化して経営の安定化を目指す。現在アイスクリームで計画中。</p> <p>6次産業化が軌道に乗ったら野菜を減らして果樹経営に力を入れていきたい。</p>